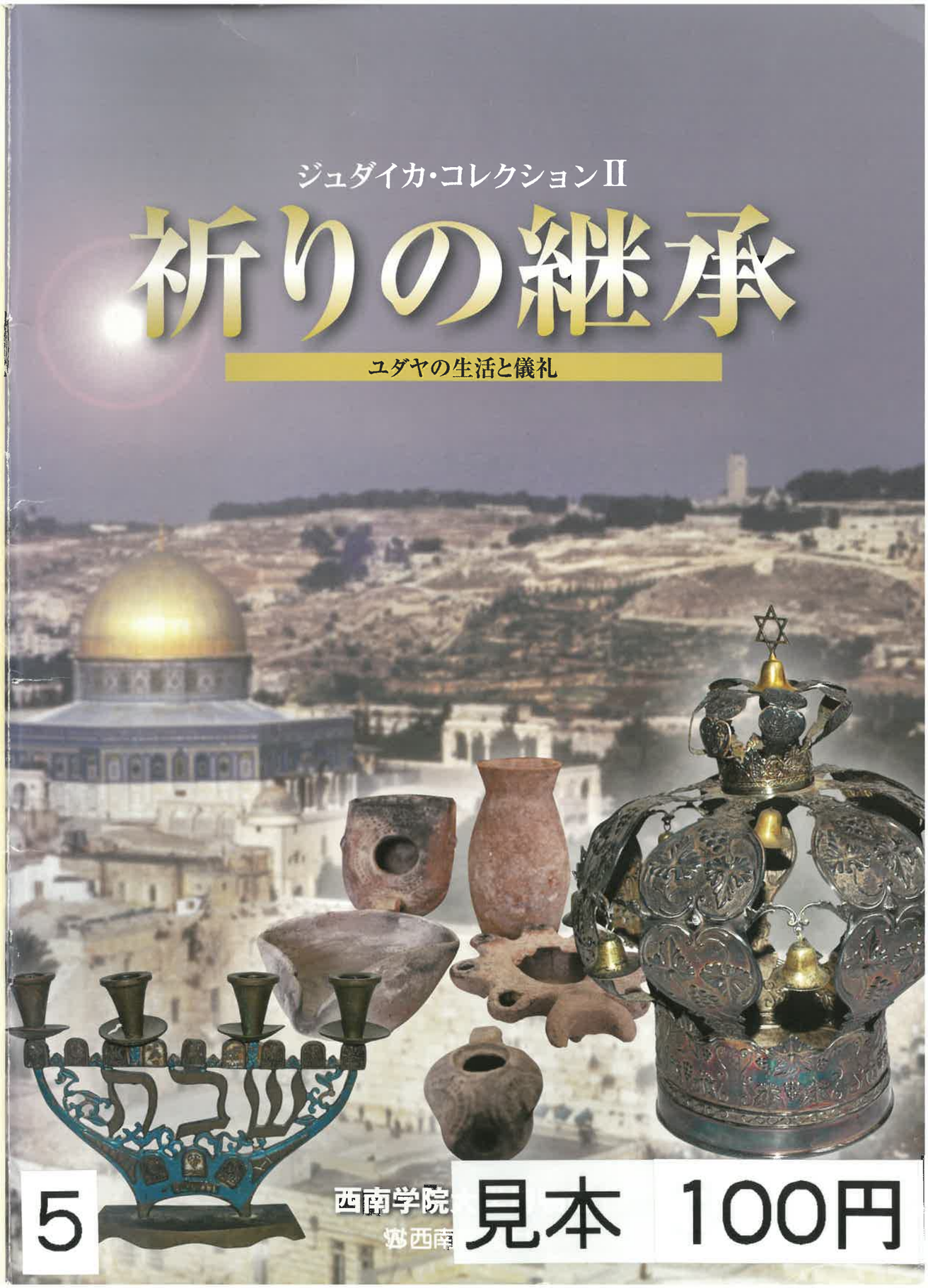
JUDAICA COLLECTION II

西南学院大学博物館
SEINAN GAKUIN UNIVERSITY MUSEUM
URL www.seinan-gu.ac.jp/museum/
西南学院大学

ジュダイカ・コレクションII

祈りの継承

ユダヤの生活と儀礼



5

西南学院
西南

見本 100円

ジュダイカ・コレクションⅡ

祈りの継承

ユダヤの生活と儀礼

2009（平成21年）
11月10日火 ▶ 2010（平成22年）1月16日土

西南学院大学博物館
西南学院大学

ごあいさつ

西南学院大学はキリスト教主義の大学として、学内はもとより学外に向けてもキリスト教関係の多くの研究成果を発信しています。キリスト教をより理解していただく取り組みとして、本学博物館では年に2回の特別展を開催し、関係各位のご協力を賜り多くの来館者に恵まれております。新しい発見をわかりやすく、そしてリアルに伝えられるような活動を心がけております。

一昨年前、本学博物館で「祈りの継承—ユダヤの信仰と祭—」を開催いたしました。数多くの「JUDAICA」（ジュダイカ）という美術工芸品を展示し、ユダヤ人の信仰の源でもある祭について取り上げました。今日まで連綿と続くユダヤ教の息吹を感じていただけたものと思います。また、常設展示室にはユダヤ教に関するコーナーを設けていることから、関連してご覧いただいたことで、より理解を深めていただけたものと思っております。

今回はジュダイカ・コレクションの第2弾として、ユダヤの生活に焦点をあてた「祈りの継承—ユダヤの生活と儀礼—」を開催することになりました。本展覧会も、関谷定夫名誉教授のご協力を賜り、先生が長年研究されてきた成果の一部を展示することができました。日本人には決して馴染み深いとはいえない、ジュダイカを通じて、ユダヤ人の生活や習慣、儀礼に対して理解を深めてもらえる機会になれば幸いと思っております。また、ユダヤ人の生活様式や文化、民族性にも触れていただければと思います。

最後となりましたが、今回ご協力をいただきました関谷定夫先生に御礼申し上げるとともに、本展覧会を通じてユダヤ教の胎動を感じていただければと願っております。

2009年11月10日
西南学院大学博物館　**館長　高倉　洋彰**

開催概要

キリスト教の源流であるユダヤ教。しかし、我々日本人にとって、ユダヤ教はマスメディアによる報道や世界史の教科書などでたまに見聞きはするが、決して馴染みが深いものとはいえない。ましてや、ユダヤ人の生活や習慣に触れる機会というのは、極めて少ないのが現状である。

ユダヤ教の祭礼に用いられた美術工芸品「ジュダイカ（JUDAICA）」は、ユダヤ人の価値観や美術的志向を感じることができる資料である。また、ユダヤ教という宗教のみならず、歴史学的、民俗学的な要素を含む非常に価値の高いものである。ジュダイカ・コレクションから中東文化圏を理解することは、国際化社会である今日においてとても重要なことである。

2007年秋に本学博物館において、ジュダイカ・コレクションI「祈りの継承—ユダヤの信仰と祭—」を開催した。祭礼や儀式をテーマとして、ユダヤ教の信仰を紹介し、多くの来館者から好評を得た。今回もジュダイカ・コレクションの所蔵者である西南学院大学名誉教授の関谷定夫氏のご協力を得て、ユダヤ人の生活をテーマとしたジュダイカ・コレクションII「祈りの継承—ユダヤの生活と儀礼—」を開催することになった。

本展覧会は、ユダヤ人の生活の営みにスポットをあてて紹介するものである。祭礼・儀礼を支えた背景には、ユダヤの教えを守った日常生活があった。そこで、関谷名誉教授がご専門とする聖書考古学からユダヤ人の日常生活にアプローチするとともに、そこに根付いていた習慣や儀礼について「ジュダイカ」を通じて、今日まで連綿と続くユダヤ教の実像に迫りたいと考えている。

関谷定夫ジュダイカ・コレクションについて

西南学院大学名誉教授の関谷定夫氏は、聖書考古学を専門とする研究者であり、エルサレムを中心とする地域で、ユダヤ教の祭礼・儀礼具や古代イスラエル人の生活用具などを蒐集されてきた。また、切手やコインなどを含めると、相当数のコレクションになる。そのコレクションを大別すると、①ユダヤ教の儀礼具・祭具、②考古遺物・日常生活品、③写本類に分類することができる。

ユダヤ教の儀礼具・祭具には、トーラー巻物(聖書)やヤド、メノラー(七枝燭台)をはじめ、シャバット・ランプ、スパイス・タワーなどの安息日用品。シナゴーグ関係としてツェダカ・ボックスやエトログ容器、儀礼具には、割礼道具やケトゥバー(結婚誓約書)や結婚指輪などがある。

考古遺物・日常生活品としては、日常生活品として使用されていた陶製ランプがまとまった形で残されている。ランプの形状はもとより、デザインの変容など、陶製ランプの時代的変遷をたどることができる。古代ユダヤ・コインはハスモン朝時代のものから、第一次ユダヤ・ローマ戦争、第二次ユダヤ・ローマ戦争までの青銅貨などがある。

写本類には、鳥頭ハガダーやウォルムス・マハゾル、ロスチャイルド詞華集などの祈祷書、聖書がある。

約200点のコレクションの主体を占めるのは「ジュダイカ」であり、今日に至るまでのユダヤ教の儀礼を通観することができるとともに、ユダヤ人の芸術性も垣間見ることができる。また、日常生活品や写本類をあわせてみることで、日常に隣り合わせて連綿と信仰が保持されてきたことがわかる。シナゴーグに関連するジュダイカは、ユダヤ教会堂の姿を彷彿とさせるものである。そして、聖書考古学の研究者の視点で蒐集された多くの陶製ランプは、キリスト教の源流をたどることができる良質の資料である。デザイン性はもとより、利便性を考慮されながら、ランプに改良を重ねている様子も明瞭に示される。

関谷定夫氏が精力的に収集されたこれらのジュダイカ・コレクションは、日本において質量共に類を見ないものであり、非常に貴重な資料群である。また、世界各地で生活しているユダヤ人の信仰形態や、ユダヤ人の芸術志向性など、多面的にユダヤ教の実像が示される。

目　次

ごあいさつ

西南学院大学博物館　館長　髙倉　洋彰 02

開催趣旨 03

関谷定夫ジュダイカ・コレクションについて 04

Ⅰ. トーラー～ユダヤの『教え』～ 06

Ⅱ. ユダヤの生活～聖書考古学の世界～ 10

コラム　陶製ランプの変遷

コラム　ユダヤ・コインについて

「ハヌカ」～ユダヤの遊び～

Ⅲ. 儀礼～ユダヤの安息日と結婚～ 25

コラム　ユダヤ人の結婚

Ⅳ. ユダヤ教会堂の姿 32

付録・参考文献・講演会 38

出品目録 39

凡　例

・本図録は2009(平成21)年11月10日(火)から2010(平成22)年1月16日(土)にかけて開催した西南学院大学博物館秋季特別展「ジュダイカ・コレクションⅡ **祈りの継承**—ユダヤの生活と儀礼—」にあたり、作成したものである。

・図版番号は、出品目録番号に一致するが展示順番とは必ずしも一致しない。

・本図録の解説およびコラムは安高啓明(本学博物館学芸員)が行なった。

・なお、本図録作成にあたり、貞清世里(本学大学院国際文科研究科博士後期課程)、早瀬遼子(本学大学院国際文科研究科博士後期課程)、平川知佳(本学大学院国際文科研究科研究生)、下川大智(本学大学院国際文科研究科研究生)、中松沙織(本学大学院国際文科研究科博士前期課程)、小林史奈(本学大学院国際文科研究科博士前期課程)が補助した。

I トーラー～ユダヤの『教え』～

聖書全体を指し、『教え』という意味をもつトーラー（TORAH）。トーラーは、ユダヤ人の生活の基本原理とされ、礼拝で用いられるトーラーは専門の書記によって手写しされた羊皮紙の巻物でなければならないとされた。そのため、ユダヤ教ではトーラー巻物に特別な扱いをしており、高価なアクセサリーや装飾品が考案された。ユダヤ人の根底にあるトーラーを通じてみることができる生活意識を紹介する。

1

2

3

1 トーラーとトーラーケース

トーラーとは、「教え」という意味で聖書全体を指す。ユダヤ教ではシナイ山で神から授かったもので、神威の源泉であり、全ユダヤ人の生活の基本原理とされた。巻物は会堂の中央奥の聖櫃に納められ、刺繍で飾ったマントを着せられたり、銀製・木製のケースで保管される。本資料はモロッコ製の大型トーラー巻物で、56枚の羊皮紙で綴じられている。

2 トーラー

トーラーは安息日（シャバット）ごとに読みすすめられ、1年かけて最初から最後まで全て読まれる。読み終わると翌週から再び最初から読み始められ、常に途絶えることなく続けられることが義務となっている。礼拝で用いられるトーラーは専門の書記によって手写しされた羊皮紙の巻物でなければならないとされた。

3 胸当て

これは、昔、大祭司（古代イスラエルでは神と民との仲立ちとして祭儀を行なう祭司という公職のひとつで、祭司長＝大祭司、次席祭司、平祭司がある）が着用した胸当て（ホーシェン）を模したものである。イスラエル・ユダヤ両民族を象徴する二頭の獅子が彫刻されている。胸板の下方には凹所には安息日（シャバット）の銘板が取り付けられている。

4

5

6

7

8

9

10

4 冠

ユダヤ教では中世時代以降、トーラー巻物に対する特別な尊敬から高価なアクセサリーや装飾が考案された。トーラー巻物を女王にみたてて、マントを被せたり王冠を取り付けたりした。この王冠には、ユダヤ教のシンボルである葡萄の葉と蔓（つる）、実が薄く浮彫されている。

5 6 7 8 9 10 ヤド

ヤドはヘブライ語で手（指）を意味する。巻物を朗読する時にその箇所を指示するために使われる。それは、巻物に直接手を触れることは手を汚す罪とされているためである。ヤドは先端が細くなっており人差し指を伸ばした握り拳の形になっているのが特徴である。色々な素材で作られているとともに、多種多様な装飾も施され、芸術的要素が非常に高くなっている。

II ユダヤの生活〜聖書考古学の世界〜

イスラエルを含む中近東の古代都市遺跡を発掘すると、陶製のオイル・ランプが出土する。「ランプはランプと呼ばれる。人間の魂はランプと呼ばれる」と言われるように、ランプは古代の人々にとって、生命と幸福のシンボルとされ、また最もポピュラーな日用品でもあった。ユダヤで鋳造された貨幣（コイン）や水差、小壷とあわせてみることで、日常生活を営むユダヤ人の姿が浮き彫りとなる。

11

12

13

14

15

16

11 平皿型ランプ　12 深底平皿型ランプ　13 浅底平皿型ランプ

最古の陶製ランプは前3000年紀のもので、平らな皿の形をしており、芯はそのふちの一つに挟むようになっている。前2000年頃の中期カナン時代のものは、ふちが四つに分かれていて、その各々に芯を挟むようになっている。

14 台付平皿型ランプ

平らな形状をした皿のものから、台座をつけて安定させるために円盤形の台が付けられることがあった。また芯をはさむ口はひとつとなった。

15 ノズル付小型ランプ

芯口がひとつになると、ノズルの部分を延ばしたランプが作られるようになる。

16 小型ランプ

ランプの形は時代や場所によって異なるが、一般的に小型で、素朴なデザインのものが多い。このランプも胴の左右を接合しただけのシンプルなデザインのランプで芯口はひとつである。

17

18

19

20

21

陶製ランプの変遷

ランプに使われる油は、イスラエルではオリーブ油が使われる。灯火は、人間の魂と生命及びその幸福のシンボルであった。ランプは、世俗的・日常的用途のほかに、儀礼的・秘儀的用途があった。特に、死者の埋葬の時には、死者の道を照らし、死者と生者のつながりを示す象徴として用いられた。灯火用の芯は通常、亜麻が用いられ、一本のひもの形状に編んで用いた。

当初、平たい皿の形をしていたものに始まり、安定のために台座が作られ、また注油口が設けられたり、把手が付けられたりして利便性も追求された。ランプの作り方にはろくろ製と鋳型製とがあり、ローマ時代以降は鋳型を使うようになった。キリスト教のランプは、十字架や宗教的デザインで装飾されたが、ユダヤ教の場合はメノラーやナツメヤシなどユダヤ教のシンボルが用いられたのが特徴である。

日常生活に隣り合わせのユダヤ人の信仰形態が陶製ランプからも示されるのである。

17 小型ランプ

胴の中央に穴を開け、芯口が長いノズルのランプである。胴の円の周囲にはデザインを施していないシンプルなランプである。

18 装飾付ランプ

胴に円い注油口を設け、端に把手を付けたもの。胴の表面にはデザインを施している。ユダヤ人はその宗教的シンボルを浮き彫りしたものを特に用いた。

19 装飾付ユダヤ・ランプ

キリスト教のランプは十字架やその他の宗教的デザインで装飾されたが、ユダヤ教ではメノラーやナツメヤシなどのユダヤ教のシンボルが用いられた。

20 メノラー装飾付ユダヤ・ランプ

ローマ時代のランプの胴は円形のものが多かったが、ビザンチン時代のランプは卵形になった。これは卵形の胴に装飾を施したランプである。

21 魚尾型把手付平型ユダヤ・ランプ

非常に装飾性の高いランプであり、芯の受け口は７個ある。メノラーをモチーフにしたデザインのため7つの口がある。

22

23

24

25

22 香ショベル

香ショベルは、メノラー、角笛と同じように祭具のひとつである。このショベルは、ローマ時代のもので、青銅製のシンプルなデザインとなっている。

23 テラコッタ製把手付水差し

800度程の温度で焼成されたもの。茶色を含んだオレンジ色をしているのが特徴である。

24 小壺

ビザンチン時代(324〜640年)のもの。把手もなく簡素化している。

25 小壺

利便性のために把手が付けられている。

26

27

28

29

30

31

26 27 28 ガラス（小瓶）

29 ガラス（小瓶破片）

考古遺物には陶製のものだけではなく、多くのガラス製品もある。日常生活や儀礼、祭礼などで利用されたと思われるが、シンプルなものからデザイン性のある物まで発掘されている。

30 アレクサンドロス・ヤンナイオス貨幣

アレクサンドロス・ヤンナイオス王（前103～76年）が、鋳造した小型青銅貨。表面に錨が描かれ、その周りに王のギリシア語名「バシレイオース・アレクサンドルー」が銘記されている。裏面には八本の光芒を有する星と彼のヘブル語名「イェホナタン・ハメレク」が銘刻されている。

31 マタティアス・アンティゴノス貨幣

ハスモン朝最後の王マタティアス・アンティゴノス（前40～37年）が発行した青銅貨。表面は一本の「豊饒角」（ギリシャ神話で幼児のゼウスに授乳したと伝えられる山羊の角を表したもの）、周りに「大祭司マタティヤ」と銘刻されている。裏面にはオリーブの花輪で囲んだ「王アンティゴ」の銘がある。

32

33

34

35

32 ヘロデ大王貨幣

ヘロデ大王とその後継者たちが鋳造した青銅貨。表面が錨、裏面が一対の豊饒角を刻んでいる。二本の豊饒角の間にヘルメス杖が描かれ、ユダヤにおいては健康と治療のシンボルとされた。錨は地中海岸のカイザリア港建設の完成を記念したものであろう。

33 ヘロデ・アグリッパI世貨幣

ヘロデ・アグリッパI世（37年〜44年）が発行した青銅貨。表面は傘の形をした天蓋、周囲に「アグリッパ王」と銘記され、裏面は三本の大麦の穂を描いている。三本の麦の穂は国の豊饒を象徴するものである。

34 第一次ユダヤ・ローマ戦争第三年シェケル銀貨

第一次ユダヤ・ローマ戦争時代（66〜70年）にユダヤ人は反ローマ的民族主義を標榜した銀貨を鋳造した。表面には聖杯の上にヘブル語略符号で「第三年」、裏面に３個のざくろの実と、「聖なるエルサレム」と銘刻されている。

35 第一次ユダヤ・ローマ戦争第二年青銅貨

表面に「両把手付きアンフォラ」を中央に配し、その周りに古ヘブル書体で「第二年」と銘刻されている。裏面にはぶどうの葉を中央に浮き彫りし、「シオンの自由」（ヘルート・ツィオン）と銘刻されている。

「ハヌカ」～ユダヤの遊び～

ハヌカ祭りで子供たちの遊びとして流行したのがコマ回しだった。四角の形をしたものが一般的で側面にはアルファベットが書かれている。イスラエルのスビボンには「N　G　H　P」(偉大なる奇跡がここにあった)が刻まれている。ここでは、過去から現代に至るまでの種々のスビボンを紹介する。

36

37

古代ユダヤ・コインについて

ユダヤでコイン(貨幣)が鋳造されたのは、ハスモン朝成立以後のことである。最初のユダヤ・コインを発行したものはハスモン朝中興の英王アレクサンドロス・ヤンナイオスである。各コインを通覧すると、貨幣を発行する王の名前とともに、王を象徴する図像が銘刻されていることがわかる。例えば、アレクサンドロス・ヤンナイオス貨幣(資料番号30)には「星」と「錨」が刻まれているが、星はユダヤのシンボルであり、錨は当時ハスモン家が地中海岸線の制海権を確保したことを意味している。

また、ヘロデ王貨幣で刻まれる「錨」(資料番号32)は、王の一大事業であった地中海岸のカイザリア港建設の完成を記念したものと思われる。国の豊饒を意味する「三本の麦」(資料番号33)など、ユダヤに関連する図像を基本としながら、そのモチーフは王によって様々であったことがわかる。

36 第二次ユダヤ・ローマ戦争の青銅貨

表面に「七枝と二房の実をつけたナツメヤシ」を浮彫にし、反乱の指導者バル・コホバの地位を示す称号「シメオン」の名を記す。裏面には中央にぶどうの葉を描き、その周りに「エルサレムの自由のために」の語を銘記している。

37 スビボン(ハヌカ・コマ)

38

39

38 39 スビボン（ハヌカ・コマ）

40

41

42

40 41 42 スビボン（ハヌカ・コマ）

儀礼～ユダヤの安息日と結婚～

人間にとって生活と隣り合わせの存在が儀礼である。安息日は、ユダヤ人の習慣として重視され、金曜日の夕方のカバラット・シャバットの祈りの時に葡萄酒を飲むにあたり、キドゥシュ（聖別）という祝福の祈りが唱えられ、安息日最後の別れの儀式ハブダラーの時はスパイス（香料）をくゆらす儀式があった。また、結婚にあたってもケトゥバーを式当日に、新郎から新婦に手渡す習慣があった。こうした通過儀礼からユダヤ人が守り続けた習慣を垣間見ることができる。

43

44

45

43 大型ハヌキヤ

ハヌキヤはハヌカの祭り（宮清めの祭り）で使用する燭台である。エルサレム神殿から１日分の油しか入らない陶製の壺が発見され、点火したところ８日間燃え続けたという。この奇跡を記念してハヌカ祭りは８日間行なわれ、これを象徴するように８枝と点火用の受け皿とをあわせて、通常９枝からなる燭台が用いられるようになった。

44 シャバット・ランプ

安息日（シャバット）はユダヤ人の信仰生活の基本で、女王（マルカ）や花嫁（カラ）とも呼ばれ、厳粛に喜びを以て迎えられる。安息日が始まる前の金曜日夕方には、家庭でシャバット・ランプに火が灯される。火が灯されると労働することが禁じられた。

45 シャバット・クロス

シナゴーグ（会堂）の講壇の上に敷かれるシャバット・クロス。「安息日を覚えて聖とせよ」の句が刺繍されている。

46

47

48

49

50

46 キドゥシュ・カップ

安息日が始まる金曜日の夕方に行なわれるカバラット・シャバットの祈りの時はまず葡萄酒を飲むが、その容器がキドゥシュ・カップと呼ばれる。通常、銀製であるが、金属、ガラス製も使われることがある。装飾も祝日にふさわしいデザインで、聖句も施されている。

47 キドゥシュ・カップ

銀製のキドゥシュ・カップで、表面にはアケダト・イツハクの浮彫が施されている。

48 キドゥシュ・カップ

「バルフ・アッター・アドナイ・エロヒーム・メレフ・ハオーラーム・ボーレイ・プリ」と銘記され、その下に聖書の主要物語の場面が浮彫されている。

49 キドゥシュ・カップ

ユダヤ人の成人式（13歳）のバル・ミツヴァ用のカップ。

50 キドゥシュ・カップ

銀製の多いキドゥシュ・カップであるが、その素材は様々であった。これは陶製のカップで、珍しいものである。

51

52

53

54

55

51 カポレット付パロケット（トーラー・カーテン）

シナゴーグ（会堂）の一番奥には、至聖所というべきトーラー聖櫃があるが、ここにカラフルな装飾刺繍をほどこしたカーテンがかけられた。それは荒野時代の幕屋の聖所に垂れ幕が掛けられていたことに由来する。刺繍は、伝統的様式化され、律法の冠（ケテル・トーラー）、十戒ユダヤを象徴する獅子などが施された。

52 53 54 スパイス・タワー

安息日に用いられるスパイスを入れ、香を焚く容器をスパイス・タワーという。スパイスとしてはミルトスの葉が使われ、安息日が如何にかぐわしい快い一日であったかを追想する。デザインは自由で、形も花や果物、魚など様々であるが、塔の形をしたものが最も多い。

55 スパイス・タワー

キドゥシュ・カップとスパイス・タワーを組み合わせたもの。土曜日の夕方、シャバット（安息日）との別れであり、週の区切りでもある「隔て」を意味するハブタラの儀式を行なうときには分解して使用する。スパイス・タワーの屋根の上には、バイオリン弾きがいるが、ユダヤ人家族の物語『屋根の上のバイオリン弾き』を表している。

56

57

58

ユダヤ人の結婚

結婚は「婚約」（キドゥシーン）と「結婚式」（ニッスィーン）からなる。婚約は証人たちの前で行なわれ、新郎から新婦へ贈り物を渡し、婚約を宣誓し、祝福が唱えられて、一杯のワインを新郎新婦で分かち飲む。結婚式では、フッパーと呼ばれる婚礼用の天蓋の下に立ち一杯のワインを分かつ。そしてエルサレム神殿の崩壊を悼むために花婿がワイングラスを割る儀式を行ない、披露宴へとうつることになる。

ユダヤ人は結婚の時にケトゥバー（結婚誓約書）を手渡すことになっている。伝統的な本文以外に、結婚前に当事者同士で取り決めた結婚の諸条件を記入していた。また、花嫁が持参金として父の家から持ってきた家庭用品の額も記された。本文は、パレスチナ・ユダヤの日常語であったアラム語で記され、それに翻訳がつくこともあった。

現代では、司会者が大声でアラム語本文を読み、その後で新郎新婦の言葉でその抜粋を読み上げる。

56 57 ケトゥバー（結婚誓約書）

ユダヤ人は結婚当日、あらかじめ用意した契約書を式の当日に新郎から新婦に手渡す習慣になっている。これには夫の妻に対する財政的義務などが記されている。結婚式ではこの文面が読み上げられ、花嫁に渡される。

58 結婚指輪

花婿が花嫁に贈る結婚指輪は、花嫁の人差し指に嵌められる。この指輪は、中に香入れがあり、豪華な意匠が施されている。指輪上部には建物の装飾があり、夫婦の新しい生活とエルサレムの神殿を象徴している。

IV ユダヤ教会堂の姿

ユダヤ教会堂（シナゴーグ）には、多くのユダヤ人が集まり、宗教儀式のための礼拝堂として、また勉学のために用いられるなどした。ユダヤ教会堂の様子を窺い知れるものとして、入口付近に置かれて人々が喜捨を投じた「ツェダカ・ボックス」がある。また、柑橘類の実で秋のスコット祭で用いられた「エトログ・ボックス」は、教会堂に持参された。このような教会堂を取り巻く宗教道具から、当時のユダヤ教会堂の姿が浮き彫りになる。

59

60

61

62

63

64

59 60 61 62 63 64 メズーザー

メズーザーとは、ユダヤ人の家や商店の入口右側の柱に取り付けられている小さいケース（筒）に入った羊皮紙の巻物のことである。丸く巻くか折って小さい窓の空いたケースに入れて戸口に取り付ける。中世以降迷信的な要素が加わり、悪霊から守ってくれる一種の護符と考えられるようになった。現在では、お守りやアクセサリーとして用いられる。

65

開放時

65 メズーザー

メズーザーとは、ユダヤ人の家や商店の入口右側の柱に取り付けられている小さいケース（筒）に入った羊皮紙の巻物のことである。丸く巻くか折って小さい窓の空いたケースに入れて戸口に取り付ける。中世以降迷信的な要素が加わり、悪霊から守ってくれる一種の護符と考えられるようになった。現在では、お守りやアクセサリーとして用いられる。

66

67

68

69

スコットの様子。
男性の左手にはエトログがある。

66 67 68 69 エトログ・ボックス

秋の仮庵祭（スコット）で用いられる柑橘類の実エトログを収める特製の箱。エトログは聖書で「立派な木の実」となっており、レモン科の植物でシトロンともいう。エトログは味も香りも良く、トーラーが知識と善行とを象徴していることから、エトログはその両者を併せ持った模範的なユダヤ人を指すという説がある。また、その形状から人間の生命の中心である心臓を指しているとも解される。

70

71

72

70 71 72 ネル・タミード

シナゴーグのなかのトーラーを納めた聖櫃の左右に大きなメノラー（七枝燭台）が置かれるが、天井からはネル・タミードが吊り下げられる。「永遠の灯」と呼ばれ、夕暮れから朝まで主の御前では絶えず火が灯されている。それは神の現臨と会衆の幸福を象徴するものとされる。ネル・タミードに火を灯すことはシナゴーグの献堂式の際の重要なひとつとされる。

73

74

75

73 74 75 ツェダカ・ボックス

もともと「正義」という意味をもつツェダカは、同時に「救い」をも意味することばである。また、人を助けるための施しは正義（救い）の行為にあたることから、施し「善行」の意味にも用いられる。シナゴーグの入口にツェダカ・ボックスは置かれ、ヘブライ語で「ツェダカ」と書かれている。今では各家庭で安息日に母親が子供たちに、貧しい人のため小遣いの一部をツェダカ・ボックスに入れさせる習慣がある。

聖書考古学年表及びイスラエルユダ王国年代表

統一王国時代(B.C.)					
サウル	c.1020−1004				
ダビデ	1004−965				
ソロモン	965−928				
ユダ王国		(預言者)	イスラエル王国		(預言者)
レハベアム	928−911		ヤラベアムI	928−907	
アビヤ	911−908		ナダブ	907−906	
ア　サ	908−867		バアシャ	906−883	
ヨシャファト	867−846		エ　ラ	883−882	
ヨラム	846−843		ジムリ	882	
アハジヤ	843−842		オムリ	882−871	
アタリヤ	842−836		アハブ	871−852	エリヤ
ヨアシ	836−798		アハジヤ	852−851	
アマジヤ	798−769		ヨラム	851−842	
ウジヤ	769−733	イザヤ	イェフー	842−814	エリシャ
ヨタム	758−743		イェホアハズ	814−800	
アハズ	733−727		ヨアシ	800−784	
ヒゼキヤ	727−698	ミカ	ヤラベアムII	784−748	アモス
メナシェ	698−642		ゼカリヤ	748	
アモン	641−640		シャルム	748	ホセヤ
ヨシヤ	640−609		メナヘム	747−737	
イェホアハズ	609	エレミヤ	ペカヒヤ	737−735	
イェホヤキム	609−598		ペ　カ	735−733	
イェホヤキン	597	エゼキエル	ホセア	733−724	
ツェデキヤ	596−586				

聖書考古学年代表

日　付	考古学的年代	歴史的年代	日　付	考古学的年代	歴史的年代
12000−7500B.C.	中石器時代	前歴史時代	1200−1150	鉄器時代　ⅠA	
7500−4000	新石器時代	前歴史時代	1150−1000	〃　ⅠB	イスラエル時代Ⅰ
4000−3150	銅石器時代	前歴史時代	1000−900	〃　ⅡA	イスラエル時代Ⅱ
3150−2850	初期青銅器時代Ⅰ		900−800	〃　ⅡB	
2850−2650	〃　Ⅱ	初期カナン時代	800−586	〃　ⅡC	イスラエル時代Ⅲ
2650−2350	〃　Ⅲ		586−332	ペルシア時代(鉄器時代Ⅲ)	
2350−2200	〃　Ⅳ(ⅢB)		332−152	ヘレニズム時代Ⅰ	
2200−2000	中期青銅器時代Ⅰ		152-37	ヘレニズム時代Ⅱ(ハスモン時代)	
2000−1750	〃　ⅡA	中期カナン時代	37−324A.D.	ローマ時代	
1750−1550	〃　ⅡB		324−640	ビザンティン時代	
1550−1400	後期青銅器時代Ⅰ		640−1099	初期アラブ時代	
1400−1300	〃　ⅡA	後期カナン時代	1099−1291	十字軍時代	
1300−1200	〃　ⅡB				

参考文献

・アブラハム・コーヘン著、村岡崇光訳、『タルムード入門』、教文館、1997年。
・アラン・ウンターマン著、石川耕一郎、市川裕訳、『ユダヤ人：その信仰と生活』、筑摩書房、1983年。
・石川耕一郎訳、『過越祭のハガダー』、山本書店、1988年。
・市川裕著、『ユダヤ教の精神構造』、東京大学出版会、2004年。
・市川裕[ほか]著、『聖書に生きる：トーラーの成立からユダヤ教へ：展示解説』東京大学大学院総合文化研究科・教養学部美術博物術館、2006年。
・上田和夫著、『イディッシュ文化：東欧ユダヤ人のこころの遺産』、三省堂、1996年。
・エレーナ・ロメーロ・カステーヨ、ウリエル・マシーアス・カボーン著、那岐一堯訳『図説ユダヤ人の2000年：歴史篇、宗教・文化篇』、同朋舎出版、1996年。
・カス・センカー著、佐藤正英監訳、『ユダヤ教』、ゆまに書房、2004年。
・シーセル・ロス著、長谷川真、安積鋭二訳、『ユダヤ人の歴史：新装版』、みすず書房、1997年。
・ジョン・リッチズ著、池田裕訳・解説、『聖書』、岩波書店、2004年。
・「西洋美術研究」編集委員会編、「特集美術史とユダヤ」、「西洋美術研究」、No.4、三元社、2000年。
・関根正雄著、『イスラエル宗教文化史』、岩波書店、2005年。
・関谷定夫著、『図説　旧約聖書の考古学：増補改訂版』、ヨルダン社、1986年。
・関谷定夫著、『考古学でたどる旧約聖書の世界』、丸善、1996年。
・関谷定夫著、『聖都エルサレム：5000年の歴史』、東洋書林、2003年。
・関谷定夫著、『シナゴーグ：ユダヤ人の心のルーツ』、リトン、2006年。
・ダン・コーン＝シャーボク著、熊野佳代訳、『ユダヤ教』、春秋社、2005年。
・チャーレス・スズラックマン文・イラスト、中道久純訳、『ユダヤ教：イラスト版オリジナル』、現代書館、2006年。
・土岐健治著、『初期ユダヤ教の実像』、新教出版社、2005年。
・土岐健司著、『初期ユダヤ教研究』、新教出版社、2006年。
・ニコラス・デ・ラーンジュ著、柄谷凛訳、『ユダヤ教入門』、岩波書店、2002年。
・ニコラス・デ・ラーンジュ著、柄谷凛訳、『ユダヤ教とはなにか』、青土社、2004年。
・ノーマン・ソロモン著、山我哲雄訳・解説、『ユダヤ教』、岩波書店、2003年。
・ハーマン・ウォーク著、島野信宏訳、『ユダヤ教を語る』、ミルトス、1990年。
・ポール・ジョンソン著、石田友雄監修、阿川尚之、池田潤、山田恵子訳、『ユダヤ人の歴史：上下巻』、徳間書店、1999年。
・松尾剛次編著、『思想の身体：戒の巻』、春秋社、2006年。
・マーティン・ギルバート著、池田智訳、『ユダヤ人の歴史地図』、明石書店、2000年。
・マルタ・モリスン、ステファン・F・ブラウン著、桑剛平訳、『ユダヤ教』、青土社、2004年。
・ミルトス編集部編、『やさしいユダヤ教Q&A』、ミルトス、1997年。
・R.C.ムーサフ＝アンドリーセ著、市川裕訳、『ユダヤ教聖典入門：トーラーからカバラーまで』、教文館、1990年。
・ヤコブ・ニューズナー著、山森みか訳、『ユダヤ教：イスラエルと永遠の物語』、教文館、2005年。
・山本祐策著、『ユダヤ人の婚姻』、近代文芸社、2001年。
・吉見崇一著、『ユダヤの祭りと通過儀礼』、リトン、1994年。
・吉見崇一著、『ユダヤ教小辞典』、リトン、1997年。
・ルーベン・ターナー著、高階美行訳・解説、『ユダヤ教のお祭り』、同朋舎出版、1989年。
・レイモンド・シェインドリン著、高木圭訳、『物語ユダヤ人の歴史』、中央公論新社、2003年。
・ロバート・アロン、アンドレ・ネエール、ヴィクトル・マルカ著、内田樹訳、『ユダヤ教：過去と未来』、ヨルダン社、1998年。

第６回特別展関連公開講演会

期日：2009(平成21)年11月21日(土)　　講師：大津 忠彦氏(筑紫女学園大学教授)
時間：15:30〜17:00　　演題：「古代オリエント史におけるユダヤ」
会場：大学博物館(ドージャー記念館)２階講堂

出品目録

番　号	資　料　名	時　　代	形　　質
1	トーラーとトーラーケース		羊皮紙製、銀製
2	トーラー	19世紀	羊皮紙製
3	胸当て		銀製
4	冠		銀製
5	ヤド		銀製(ロシア製)
6	ヤド		銀製(イエメン製)
7	ヤド		銀製(エルサレム製)
8	ヤド		銀製、貝(バルカン製)
9	ヤド		銀製
10	ヤド		木製
11	平皿型ランプ	中期カナン時代(B.C.3100〜B.C.1850)	陶製
12	深底平皿型ランプ	中期青銅器時代(B.C.1850〜B.C.1550)	陶製
13	浅底平皿型ランプ	鉄器時代、イスラエル時代(B.C.1200〜B.C.930)	陶製
14	台付平皿型ランプ	B.C.1000〜B.C.600)	陶製
15	ノズル付小型ランプ	ヘレニズム時代(B.C.330〜B.C.63)	陶製
16	小型ランプ	ハスモンス時代(B.C.２世紀〜B.C.１世紀)	陶製
17	ランプ	ヘロデ時代(B.C.37〜A.D.135)	陶製
18	装飾付ランプ	ヘロデ時代(A.D.70〜A.D.150)	陶製
19	装飾付ユダヤ・ランプ	2世紀〜4世紀	陶製
20	メノラー装飾付ユダヤ・ランプ	ビザンチン時代(4世紀〜5世紀)	陶製
21	魚尾型把手付平型ユダヤ・ランプ	タルムード時代(3世紀〜5世紀)	陶製
22	香シャベル	ローマ時代(１世紀)	青銅製
23	テラコッタ製把手付水差し	B.C.1850〜1550	テラコッタ製
24	小壺	鉄器時代(B.C.1000)	陶製
25	小壺	ビザンチン時代(4世紀〜5世紀)	陶製
26	ガラス(小瓶)		ガラス製
27	ガラス(小瓶)		ガラス製
28	ガラス(小瓶)		ガラス製
29	ガラス(小瓶破片)		ガラス製
30	アレクサンドロス・ヤンナイオス貨幣		青銅製
31	アンティゴノス・マタティアス貨幣		青銅製
32	ヘロデ大王貨幣		青銅製
33	ヘロデ・アグリッパI世貨幣		青銅製
34	第一次ユダヤ・ローマ戦争第三年シュケル銀貨		銀製
35	第一次ユダヤ・ローマ戦争第二年青銅貨		青銅製
36	第二次ユダヤ・ローマ戦争の青銅貨		青銅製
37	スピボン(ハヌカ・コマ)		銀製
38	スピボン(ハヌカ・コマ)		銀製
39	スピボン(ハヌカ・コマ)		銀製
40	スピボン(ハヌカ・コマ)(複製)		銀製
41	スピボン(ハヌカ・コマ)		木製
42	スピボン(ハヌカ・コマ)		陶製
43	ハヌキヤ		銀製
44	シャバット・ランプ	19世紀	ブロンズ製
45	シャバット・クロス		綿製
46	キドゥシュ・カップ		銀製
47	キドゥシュ・カップ		銀製
48	キドゥシュ・カップ		銀製
49	キドゥシュ・カップ		銀製
50	キドゥシュ・カップ		陶製
51	カポレット付パロケット(トーラー・カーテン)	19世紀	綿製
52	スパイス・タワー		銀製
53	スパイス・タワー		銀製
54	スパイス・タワー		銀製
55	ハブダラ・セット		銀製
56	ケトゥバー		羊皮紙製
57	ケトゥバー		紙製
58	結婚指輪	〃	銀製
59	メズーザー		銀製
60	メズーザー		ブロンズ製
61	メズーザー		木製、２点
62	メズーザー		ブロンズ製、ポーランド
63	メズーザー		銀製
64	メズーザー		真鍮製
65	メズーザー		ガラス製
66	エトログ・ボックス	19世紀	銀製、バグダッド
67	エトログ・ボックス		ヤシの実製
68	エトログ・ボックス		陶製
69	エトログ・ボックス		鉄製
70	ネル・タミード		鉄製
71	ネル・タミード	19世紀	青銅製
72	ネル・タミード		鉄製
73	ツェダカ・ボックス		銀製
74	ツェダカ・ボックス		陶製
75	ツェダカ・ボックス		銀製

西南学院大学博物館　2009年秋季特別展
ジュダイカ・コレクションⅡ　祈りの継承—ユダヤの生活と儀礼—
主　催　西南学院大学博物館　　協　力　関谷定夫氏(西南学院大学名誉教授)

展覧会図録
作成協力　関谷定夫
編　　集　安高啓明
編集補助　貞清世里、早瀬遼子、平川知佳、下川大智、中松沙織、小林史奈
発　　行　西南学院大学博物館
〒814-8511　福岡市早良区西新3丁目13番1号
電話092-823-4785
発 行 日　2009(平成21)年11月10日